

事例⑨ 第1学年・4～10月

主として関連する10の姿：健康な心と体、言葉による伝え合い

「心を動かす みんなのかかわり」

子どもの姿

4月の半ばには、給食が始まります。給食の時間が近づくと、「〇〇のにおいがしてきた！」と期待を膨らませ、給食中はおいしく食べたり、五感を使って食材に親しんだりする姿が見られています。一方で、苦手な食材に不安な思いを抱えながら「いただきます」をしている子どもも…。また、積極的に体を動かす子どもが多い体育の時間、自信をもって体を動かすににくい子どももいます。子どもたちのさまざまな思いを受け止めながら、「運動の楽しさや喜びを味わうこと」や「食べ物への興味・関心を高め、楽しく食事すること」の大切さが分かるよう指導していきます。

園でのあそびや経験をつなぐ

保育園では、食材への関心を持てる機会をつくれるように調理員さんと協力しています。食材クイズでの遊びを取り入れたり、食材となる植物の栽培に取り組んだりしています。運動遊びでは、年長児になる頃には、集団で動きを合わせたり、勝ち負けのあるゲーム遊びをしています。「食べたくない」「参加したくない」気持ちも認めながら、「やってみよう」という気持ちが出てくるタイミングを見逃さないよう関わっています。

(保育者)

小学校では、保護者の方から、これまでの生活で苦手としている活動や苦手な食材等について相談を受けることが多くあります。

子どもに「保育園では、どうしていたの？」と、問いかけると「自分で量を調整していた」と答える子どももいれば、「お弁当だったから、苦手なものは食べてなかった」と答える子どももいました。

「今は〇〇したくない」という気持ちを否定せず、前向きな気持ちに変わっていくよう工夫して機会をつくっていきます。(小学校教員)

子どもたちが就学前施設での経験を通して得た「安心と挑戦の循環」の基盤、就学間もない時期には十分に発揮しにくいこともあります。小学校生活の始まりにおいては、スタートカリキュラムを実施し、教師は子どもたちの様子を丁寧に見取りながら、一人ひとりに応じた関わりを工夫しています。特に、友達からもらう力は彼らの安心のたねの一つ。教師は豊かな関わり合いが生まれるよう、子どもたちに任せたり、多様な意見を肯定的に、時にユーモアを交えて受け止めたりしながら、子どもと共に学ぶ授業を展開しています。

(コーディネーター)

■特別活動「なんでも食べよう」：「体を動かす素(もと)」ってなあに？

行動・発言

授業中、普段から何でもよく食べるAさん、「食べ物には『げんきっず』(三大栄養素)があるんだね！」と驚きの声をあげて、目を輝かせながら話していました。それを隣で聞いていた牛乳が少し苦手なBさん。給食の時間、Bさんは「牛乳には赤色のげんきっずが入っているから、もう少し頑張って飲んでみようかな」と、Aさんの関心に心を動かされたようなつぶやきがありました。

行動・発言

その後、栄養士による給食の巡回指導がありました。Cさんが、「これって黄色のげんきっずだよ？」と、前に学んだことを、その日の献立と結び付けて栄養士に向けて伝えていました。口にした食べ物の味や食感だけでなく、栄養やその役割もあることを知ったことの驚きとうれしさを伝える姿がありました。牛乳が少し苦手なBさんも、「なんでも食べよう」の学習での友達の姿を思い出して、その日はいつもよりも頑張って飲もうとチャレンジしていました。学び合い、心を動かされることが、一人ひとりの「やってみよう！」という意欲に繋がることを感じました。



■体育科「表現遊び」で真似して、試して、工夫して



「えびってピョンってほねるよね!」「こんな感じ?」

みんなで真似して、みんなで動かって面白い!ぼくのもやってみよう。

→体育科の表現遊びでは、自分の考えた動きに自信が持てず、不安で体をのびのびと動かせない子どもがいました。そこで、丸くなって、互いの動きが見合えるよう、コミュニケーションがとれるよう練習の場を工夫してみました。

行動・発言

「わたし、たこみたいに、もっとぐにやぐにやうごいてみるね!」「あしがいっぱいあるから、ぜんぶうごかさなきゃ!」と、たこの柔らかく自由な動きを友だちに見せてもらい、新たな動きを試し合い、自分なりの工夫を認めてもらい、大きな笑顔と歓声はじけます。互いに良さを共有し、取り入れる姿がありました。

えびの動きでは、「しっぽで『バシッ』てみずをけるんだよ!」とある子が話すと、跳ねるような素早い動きがみんなに広がり、全員が元気いっぱい全身で表現していました。

■体育科「ボール投げゲーム」：練習の振り返り



この辺りから段ボールの広いところを狙って...

→ボール投げゲームは、円の線上から円の中心にある的を狙ってボールを投げ、ボールを自分で取りに行くことを繰り返して、的に当てられた数で勝敗を決めます。勝敗だけを気にしてしまうことがないように、取り組んだことに対する感想を伝え合う時間を確保しました。

行動・発言

ある練習の場面です。投げるのが得意な子が友だちのあまり得意でない子の投げ方を見て、近くに行き、「(的の)段ボールの広いところを狙うといいよ」「もっと強く投げるために、踏ん張って!」と、その子の投げ方をよく見てアドバイスをしていました。

試合の後、感想を話す時間になると、「同じチームの子が得点入ると、自分じゃなくても嬉しい気持ちになる!」…そんな言葉が聞けて、アドバイスを貰った子ども、同じチームの友だちもにっこり笑顔に。

友達同士の力を感じ、それぞれの達成感を味わう姿がありました。

ポイント

■一人ひとりの思いを知り、その子に即した安心感のある支援を続ける ◎配慮事項(教材の工夫等)

「いっしょにやってみよう」



体育科では、どう体を動かせばよいのか自信がなく、動くことに躊躇い、周囲の様子を見ているだけになってしまっている子どももいました。その子の「心配だな、ちょっと苦手だな」などの理由について、こっそり聞いてみたり、その理由に合わせて支援を考えたりして行きました。

海の生き物が実際にどのように動いているのかが分かる動画を一緒に見て、動きがつかめるよう教師がジェスチャーを交えて伝えてみたり、友達と伝え合う時間を設けたりすることで、「一緒にやってみよう」と誘われて、様々な動きにチャレンジしようとする気持ちになっていました。